

「太陽と徒浪」

▼導入

うだるような暑さが続き、寝苦しい夜も多くなった。そんな日々の中でも、共に過ごしている人魚は、変わらず元気だった。

気づけば、人魚を拾った日から、約一ヶ月が経っていた。光を受けてかがやく鱗も、浴槽から覗くうつくしい尾鰭も、それらが瞬く間に人の脚へと変わるさまも見慣れた。

ひとつ気になることといえば、のびのびと泳ぐ姿をあまり見ていないことだろうか。

……いや。よく考えると、気になること自体は、ひとつだけではないのだ。

人魚に関わる言語化できない問題が、じわじわと頭角を表してきている。

.....

ゆさゆさと身体を揺さぶられ、きみは否応なしに眠りから目覚めさせられた。

〔KP〕はいつの間にか先に起床していたようで、きみが

目を開けるまで身体を揺さぶった後、しげしげと顔を覗き込んでいる。

「あ、起きましたか？ 朝ごはん作っただんです。一緒に食べましょう！」

〔KP〕はきみの腕を引いてリビングへと向かい、そのままソファへ座るよう促した。

〔PCの幸運／KPCのDEX*5〕

・成功 〔KP〕の作った朝食が美味しい。

・失敗 パンや目玉焼きが少し焦げていたりするかもしれない。

致命的失敗は……最早食べ物と呼べる状態かも怪しい。作り直そう。

【KP情報】次の文は成功時の描写例。何を作ったかなども勿論自由に決めて良い。

ローテーブルの上には、大きめの丸皿が2つ。

熟れた果実のようなオレンジ色と、縁にこんがりとした焼き色が見える目玉焼き。

瑞々しいサニーレタスと程よく焼かれたベーコン。

綺麗な焼き色がついたトーストには、少し多めにカットされたバターが乗せられ、とろりと形を崩している。

まるでお手本のような朝食だ。

眺めていると、[KPC]がキッチンからマグカップを二つ持ってくる。

ほんのり甘い香りに、それが何なのかおおよその検討はつく。

「ホットミルクです。コーヒーとか淹れようかと思ったんですけど、ちょっと難しいので……」

そう言って丸皿のそばへとカップを置くと、きみの隣へと座った。

「それじゃあ食べましょう！ いただきます！」

【KP情報】好きなだけ朝食RPをしたら次へ進む。

▼お出かけ

朝食を食べ終えた後、[KPC]が「あ！」と声を上げた。

「さつき冷蔵庫見た時、買い物に行ったほうが良いなあって思っただけですよ」

「なので、支度して出かけましょう！ またこれが来たので、お昼はどこかで食べて……」

これと言いながら話を続ける[KPC]の手元では、茶封筒が揺れている。それを見たまひは、ああまたか……と思うことだろう。

茶封筒の中身は、そこそこの額のお金であることを、きみはよく知っている。

▼回想

ことの始まりというより、茶封筒の始まりは、[KPC]を保護してから数日後経ったある日のことだ。

朝、郵便受けを確認すると、それなりの重さの封筒が一つ入っていた。触った感触からして、紙の束が入っている事はわかったかもしれない。

とりあえず持つて室内へと戻ったが、よくよく封筒を確認すると、差出人の名前も宛名も一切書かれていない。特徴的なロゴの封蝋によって、フラップがとめられているだけだった。

「中身を確認してみしよう」という[KPC]の言葉におざれて開けてみると、そこにはなぜか大金が収められていた。恐ろしくなつて封をしなおしたか、喜んでしまったかはさておき、[KPC]は遠慮なく封筒の中を覗き、一枚の紙を引つ張り出した。

紙に書かれていたのはたった一行。

「ほんの気持ちです」

……何がほんの気持ちなのか。ますますわけが分からなくなつてしまつたきみは、その封筒を交番へと届けた。きつと何かの間違いだつたんだろう。

そう思いながら数日が経つたある日。郵便受けを確認すると、例の封筒と全く同じものが入れられていたのだ。

しかし、二度目は前回と少し違った。

差出人は相変わらず書かれていなかったが、宛名だけはしっかりと書かれていた——[KPC]様と。

逆にどこか薄寒さを感じる上に、[KPC]は身に覚えがないと話す。

恐る恐る中身を確認すると、前回よりは少ない額が収まつており、やはり同様に紙が一枚入つていた。

「[KPC]様の生活費にあててください」

再度[KPC]へと問うたが、やはり首を横に振った。

その後、再びどうしたかはきみ次第ではあるが、何度交番へ届けようが戻ってくる。

そのため、諦めて[KPC]が自由に使えるお金として管理することにしたのだ。

【KP情報】これはKPCを崇める教団（特に穏健派）からのお布施。教団のものにならなくてもいいが、良い生活をしてこの街に留まつて欲しい。2回目に金額を減らしたのは、流石に大金すぎると遠慮するかな……？と考えたため。何円かは自由に決めていいが、少なくとも十万以上ではある。

「わたしは準備できましたよ！」

[KPC]の言葉ではつと顔をあげる。

今更、あのお金について考えてもどうしようもない。とりあえず、食材以外でも、足りない日用品の確認をして出

かけよう。

【KP情報】好きなだけRPをし、出かける準備が整ったら次へ進む。

▼街へ

外へ出ると、太陽が燦々ときみたちを照らす。
肌を焼くような暑さに、[KPC]もぱたぱたと手で顔を仰ぐような動作をしてる。

「暑いですね……。早いところどこか屋根のあるところへ……」

そう言って歩き出した[KPC]の後を追うようにきみも歩き出すことだろう。

自宅前の道をひたすら歩く。

その間にも常に視界に入る海は、穏やかにさざなみを立て、潮風はやさしく頬を撫でる。それが少しだけ、身体の内熱を冷ました。

そうして歩いていると、不意に[KPC]が足を止めた。

海の方を見て「そういえば、」と口を開く。

「正しい方角とかわからないし、もう会うこともないから、別にいいんですけど」

「むかし住んでいたところでは、お母様以外にたくさん人間たちが一緒にいたんです」

「わたしを育ててくれたのは、お母様ではなく、そのたくさんの方たちの一部で」

「わたしがここに居るのも、その一部の人間たちのおかげなんです……今はもう、生きていないでしょうが」

そう、事もなげに言って、[KPC]は伸びをしている。
質問を含めたRPができる。

★返答例（自ら話しても良い）

●なぜ生きていない？

↓「わたしを逃がしたから」

●詳しく聞かせて

↓「お母様がわたしを遠回しに殺そうとしていたみたいで……。そこに理由があったのか、なかったのかは、わたしにもわからないんですけど」

「優しい人間は、一匹の小さな人魚を逃すために、自分にとって絶対である存在を裏切ったんです」

「軽率で愚かですね。でも、ありがたく思います」

「ああでも、どうせお母様に殺されてしまうくらいなら、わたしが……。いえ、少し喋りすぎましたね」

【KP情報】お母様に殺されて（吸収）しまうくらいなら、自分が食べて（吸収）あげればよかったという意味。

KPCから話をしてもらい。

ある程度RPをしたら次へ進む。

「わたしの存在も、彼らの行いも、この世にとっては全て徒浪（あだなみ）です」

「気まぐれで、軽々しい。大したことのない、ちっぽけな波」

「……まあ、すぎた話という事です。よし、行きましようか」

さりげなく人の死が語られたのだが、たいして気にもとめない。なんてことない出来事のように語られた[KPC]のルートに、どこかいいしれない感情が湧いてくる。

これが不理解によるものなのか、何らかの不安感によるものなのかはわからないのだが。

S A N C 0 / 1

暫く歩くと、街へと到着する。

必要な施設はすべて揃っていて、不便な思いをすることはないが、全体的にどこか閑散としている。……というのが当初の印象だろう。

最近はどうやら、隣町から引越してくる人が増えたようで、いつ出歩いても少しだけ賑わっている。

あまりみない顔も増えたが、道ゆく人は誰もが愛想良く、変わりなくきみたちに優しい。食材や頂き物のお裾分けをしてくれる人も多い。

元々居心地の良さを感じていたのなら、その感覚が変わ

ることはないだろう。

「最近少し不思議な人は増えましたよね」

「なんかこう……やけに優しい人？ まあいいんですが」

そうして話していると、後ろから「[PC]さん、[KPC]さん」と声がかかった。

思わず振り返ると、そこにはきみにとって良く見慣れた男性が1人立っていた。榎島だ。

「こんにちは。お買い物ですか？」

【KP情報】熱中症にならないように気をつけてね等、ある程度世間話をしたら技能判定を入れる。マークについて尋ねられる前に榎島を退散させること。もし聞かれても、適当にはぐらかす。

〔目星〕

- ・成功 榎島の胸ポケットにピンズがついていることに気づく。何かのロゴマークのようだ。
- ・失敗 榎島の胸ポケットにピンズがついていることに

気づく。何かのロゴマークのようだ。

〔目星〕に成功した場合続けて「アイデア」

- ・成功 ロゴマークをどこかでみたことがある気がする。
- ・失敗 何もし

「そうだ。最近、住民が増えたでしょう？ そのせいかどうかはわかりませんが、不審者の目撃情報も多く……」
「なるべくひとりにならないように。気をつけてください
ね」

そういうと、榎島はひらひらと手を振って去っていった。

「不審者……。そういえば、わたしが[B]の家へきたばかりの時も、何かいましたよね」

「だいたい経ってるし、関係ないとは思いますが」

「暑いですし……行きましようか……」

【KP情報】実際不審者はいないが、過激派が活発になってきた為に忠告をしてきている。

探索箇所の広場、商店街はK P C誘拐事件前でも後でも
いける。得られる情報やできることは同様。

■探索箇所

広場／商店街／カフェ

□広場

街の中心にある円形の小さな広場。

中心に噴水があり、その周囲にささやかながら花壇がつ
くられている。

街路樹がせめて木陰になる様にと、円の外に等間隔でベ
ンチが配置されており、休んでいる住民もみられる。

〔聞き耳＋目星〕

・成功 通りがかった人の一部から度々意味深な視線を
感じる。また、具体的な内容は聞き取れないものの、誰か
が話題に出したのか(???)の名前のみ聞き取ることができ
る。

・失敗 度々視線を感じる。なんとなく居心地の悪さを

感じる。

【K P 情報】住民をつかまえて聞いてもなにも言わないが、
〔幸運〕に成功した場合、過激派の信者（住民）をつかま
えたことにしてもいい。この場合、やはり世間話しかしな
いが、やたらK P Cをみたり、K P Cを賛美する言葉を言
ったりするといひ。

広場の技能判定は、誘拐事件前のみ。

□商店街

それなりに賑わいを見せている商店街。

小さなスーパー以外に個人経営の魚屋や肉屋も存在する。
その他には、薬屋、雑貨屋、喫茶店など、思いつく限り
の店が入っている。

何か買いたいものがある場合は〔幸運〕

・成功 望む食材や物が手に入る。

・失敗 偶々売り切れている。代用できる物や似た物が
手に入る。

□カフェ

白塗りの壁にアンティーク調のフロアタイルがおしゃれなカフェ。

所々に貝殻や流木、人魚のレリーフや魚の置物等、海を連想させる雑貨が多く飾られている。

丁度、きみたち以外の客はいないようで、好きな席に座っていいようだ。

【KC】は真つ先に、陽が差し込まない窓際の席へと向かう。

モーニング向けの軽食以外にも、ランチやディナー向けの料理もある。

よつぽど珍しい料理でなければ、あると思ってい。

【KP情報】好きなだけ食事のRPをしたら次へ進む。

▼誘拐事件

〔聞き耳〕

・成功 アロマかお香でも焚いているのだろうか。何処

かからわずかに甘い香りがする。

・失敗 何処かからわずかに甘い香りがする。

その香りを嗅いでいると、急に目の前の【KC】が歪んだ。

まるで波打つ水面越しに眺めるかのように、ぐにやり、ぐにやりと形を変える。

嗅ぎ慣れた潮風と共に、まるでみな底へと沈んで行くかのような浮遊感。

ついに、上体を起こしておくことすら困難になって、椅子から崩れ落ちる。

どこまでが自分で、どこまでが【KC】で、どこまでが周囲の景色かも判断がつかなくなつて、そして――。

S A N c 1 / 1 d 5

発狂した場合、気絶として処理をして良い。

.....。

何処かから声がする。

「――、――」

「——か、[PC]さん！」

「しっかりとください！ [PC]さん！」

ぐらぐらと揺らされる身体。名前を呼ぶ声。

声の主は榎島だろう。そう考えたところで、なぜ彼がここに？という疑問が浮かぶ。

店内にいたはずだ。[KPC]と共に。

それになぜ、こんなにもじりじりと、身が焼かれそうな程の暑さの中にいるのだろうか。

そう思っようやく瞳を開くと、きみの顔を心配そうな表情で覗き込む榎島と目が合う。

「ああ！ よかった……。目が覚めましたか」

「こんなところで寝ていてはいけませんよ。……あの、ところで、[KPC]さんはどちらに？」

視線を横へずらすと、そこはごく慣れた風景だった。どうやら、ここは広場の隅にあるベンチのようだ。

しかし、言われて周囲を見渡しても、[KPC]の姿は見当たらない。

そもそも、ついさっきまでカフェにいたのだ。なぜこ

にいいのかという理由も、きみにはわからない。

「……何か事情が？ もしかして[KPC]さんの身になにか？」

きみが事情を話すと、榎島は眉をひそめた。

それから、深く深くため息をついて、きみに向かって頭を下げた。

「ああ、本当にすみません……。まさかこんな強引なことをするだなんて思わず……」

「[KPC]さんが何処へいつてしまったのか、おおよそ検討はついています」

「すみません。色々理由があつて……。歩けますか？ 歩きながら話しましょう」

まるで寝起きの様な気怠さがあるものの、問題なく歩くことができる。

きみが着いていく意思を見せると、榎島は気遣う様な視線を向けたのち、歩き出す。

広場を抜けると、先程のカフェの場所まで戻る。そして、

隣接した建物の間にある裏路地へ、慣れた様子で踏み出した。

「ここが近道なんです。ついてきてください」

「で、なんというか、人によつては嫌悪する話ではあるんですが」

「この街は、海とつながりが深いんです。種族的な話というか、言いづらいんですが」

「宗教観もまあ、独特で……。比較的最近ではあるんですが、新しい教団が立ち上がったりして」

「ほら、宗教といえば、信じるものや崇めるものが必要でしよう？ 特別で、力があるものや、唯一の存在というか」

「それが、まあ、[KPC]さんなんです」

「あ、着きました」

そう言つて足を止めたのは、小さな教会の前だった。

少し塗装が剥がれた外壁に、蔦がはつている。周辺の掃除はしつかりされている様だが、人が手放した建物の様相だ。

「一部の信者が所有している建物ですね。僕は許可していませんが……」

「発足してまもない事もあつて、内部分裂が起きてしまつていて」

「ぼつくり割れてしまつているんですね。穏健派と過激派で」

「崇めるもの。……[KPC]さんが自由であつて構わない穏健派と、教団に根ざして欲しいと思う過激派ですね」

「気持ちはわかりますが」

槇島にいくつか質問する事ができる。

★返答例

●[KPC]は無事か？

↓「丁重に扱われているかと思えますよ。……まあ、手荒く誘拐されてはいますが……」

●教団の名前は？

↓「実はまだちゃんと決まっていななんです。いい名前ないですか？」

●槇島が教祖？

↓「あ、はい。そうですね。……すみません。信者を管理できてなくて……」

【KP情報】PCとKPCが立ち寄った店は、過激派の信者が営むカフェ。黒い蓮の花から製造された香料を燃やして、両者に幻覚を見せた後、KPCのみ連れ去った。香料は改良している為、SANの減少は本来の判定の半分。

槇島は質問した事に対して包み隠さず話してくれるが、自分が所謂教祖的な立ち位置にいる事は自ら言わない。恥ずかしいので。

ひとしきり話したら次へ進む。

「……そうだ、これを[PC]さんに」

そう言って手渡されたのは、ごく一般的な見た目の鍵だ。

「これはこの教会の鍵ですね。因みに、盗まれる様なものもないという慢心から、セキュリティが非常に杜撰なので、ほぼ全室共通です」

「[KPC]さんは、教会の地下にいますよ」

鍵をきみに渡すと、槇島は「さて、」と言って背を向けた。

「責任もつてご一緒したいんですが、僕、今から集会に行かなきゃいけなくて」

「あ、違法集会ですよ。過激派の。近くでやっているそうです」

「よく言い聞かせてきますから。後日お詫びも……」

「なのでその……。[KPC]さんがこの街が嫌にならない様にお話ししていただけると嬉しいです」

「では！」

話だけ話して、槇島は早足で歩き出し……直ぐに振り返った。

「そうだ。その建物の地下には、[KPC]さんに関する資料もあるかと」

「僕が調査して作った資料を勝手にコピーしたものでしょうから、それが[KPC]さんの全てではありませんが……」

「側にいらっしやるお方がどの様な存在か、貴方には知る

権利がありますし」

そういうと、槇島は今度こそ来た道に戻って行った。

▼教会

正面の扉から入った先は、小さな礼拝堂だ。
ひとはなく、静まり返っている。

長椅子が等間隔に配置されており、一番奥には講壇がある。こぢんまりしているが、ごく一般的な内装だ。

また、講壇の付近には別室に繋がっているであろう扉が一つある。

〔目星〕

- ・成功 人の出入りがあるのか、外観と違って清掃が行き届いている。
- ・失敗 綺麗に片付けられている。

■探索箇所

長椅子／講壇／扉

□長椅子

背の部分にポケットがついた一般的なチャーチベンチ。全てではないが、聖書は配置したままになっている。

〔目星〕

- ・成功 一つのベンチのポケットに、聖書ではなく紙の束が入っていることに気づく。

- ・失敗 特になし。

●紙の束

数枚の紙がホッチキスで止められている。

部分的に〔KPC〕についての記載がある。

“〔KPC〕様には、各地で崇拜される名だたる神の血が流れている様だ。教団の詳細は不明。

もう片方の親の詳細も最近まで不明だったが、鑑定の結果、この街で大体（大凡KPCの年齢。ざっくりで良い）年前に行方不明になった若者だということがわかった。

我々に親しみ深い血も流れているのならば、(三三〇)様があの様なお姿をとられるのも納得がいく。

つまるところ、彼／彼女には敬うべき血が二つ流れているということである。」

今まで、(三三〇)は何者だろうかと考えなかった訳ではないだろう。

これをでたらめと感じるか、事実と感じるかは委ねられるにしろ、きみの想像を絶する見解に思うところはあるかもしれない。

S A N C 0 / 1

□講壇

飾り気のないシンプルな講壇。

誰かの忘れ物なのか、何かのロゴマークを模ったピンズが一つだけ置いてある。

〔アイデア〕

・成功 誰かから贈られてくる、謎の現金入り封筒を思い出す。封蝋のロゴが、確かこの様な形だったはずだ。

・失敗 どこかで見たマークだと感じる。どこで見たんだろうか……。

【KP情報】ピンズは信者のもの。全員持っている。(槇島がつけていたものと同じ) ロゴは予め、KP側で好きに考えておいて良い。

□扉

アンティーク調の扉。鍵がかかっているが、槇島からもらった鍵で開けられる。

↓地下一階へ

〔聞き耳〕※PLから振りたいと言われた時で良い

・成功 特に物音はきこえない。

・失敗 特になし。

〔聞き耳〕が成功でも失敗でも〔アイデア〕

・成功 人がいれば鍵をかける必要もないことや、槇島が言っていた集会の関係で、恐らくこの建物内は無人にはないかと察する。

・失敗 人がいれば鍵をかける必要もないことから、この建物内は無人的ではないかと思う。

▼地下一階

扉の先は別室に繋がってはならず、踊り場と地下へ続く階段のみだった。

他に人がいる気配や音なく、こつこつときみの靴音だけが響く。

長い階段を降りきると廊下へ着く。左右と奥に扉があり、どこから微かに機械音がする。

■探索箇所

右の扉／左の扉／奥の扉

□右の扉

鍵がかかっているが、渡された鍵で問題なく開けられる。扉の先は、休憩室のような場所だ。

シンプルな白い壁紙にグレーの床材。あのカフェで見た

ような、人魚のレリーフや置物が数個飾られている。

中央には長机と椅子が数脚あり、壁際にはロッカーが並べられている。

・詳細探索箇所

レリーフ／長机／ロッカー

・レリーフ

繊細な彫り込みが美しい人魚のレリーフだ。

〔アイデア〕

・成功 掘り込まれている人魚の姿が[KPC]とそっくりだという事に気づく。

・失敗 漠然と違和感を感じる。

〔アイデア〕に成功した場合〔アイデア／目星〕

・成功 他の置物も、よく見るとどこことなく[KPC]に似ているものが多いことに気づく。薄気味が悪い。

S A N C 0 / 1

・失敗 特になし。

・長机

何処にでもありそうなシンプルな長机。

机の上にはA4の紙束がいくつも置かれている。

〔図書館〕

・成功 どれもこれも、最近の[KPC]が一日をどの様に過ごしているかの調査書だということがわかる。その備考欄には、接触し、確保が可能と判断した場合は、速やかに行動すること。地下水槽へ収容後、必ず緊急集会を開く。と書かれている

・失敗 どれもこれも、最近の[KPC]が一日をどの様に過ごしているかの調査書だということがわかる。

この書面からして、恐らくずっと見られていたのだろう。[KPC]と共にあるきみの様子も、当然ながら記載されている。

自宅の中で何をしているか等の詳細は書かれていないが、不快であることに違いはないだろう。

S A N C 0 / 1

・ロッカー

殆ど個別の鍵がかかっているか、開いていても未使用なものが多い。

〔目星／幸運〕

・成功 一つだけ使用中にもかかわらず、鍵が差しつばなしのロッカーをみつける。

・失敗 一つだけ使用中にもかかわらず、鍵が差しつばなしのロッカーをみつける。

しかし、こうしている時に突然人が戻って来てしまったら……と考えてしまい、焦りからS A N C 1

・開ける

誰かの荷物や着替えが入っている。

荷物にはこれといって気になるものはないが、ロッカーの中に設置された小物入れに、ラベル付きの鍵が入っている。

・鍵

ラベルには、水槽横扉 外部持ち出し厳禁と書かれて

いる。

□左の扉

鍵がかかっているが、渡された鍵で問題なく開けられる。扉の先は、至る所に資料棚や収納棚が配置されており、中央には作業台が置かれている。

複雑そうな器具があちらこちらにおかれているが、きみが見たことのある器具もいくつかあるだろう。印象としては、理科の実験室を思い出す部屋だ。

・詳細探索箇所

資料棚／収納棚／作業台

・資料棚

様々な資料がファイルごとに収められている。

全て背表紙に資料内容についての記載があるが、数が多い為、当てもなく見ていくには時間がかかるだろう。

〔図書館〕 KPCの資料を探したいと宣言があった場合は判定に+20%の補正。

失敗した場合もなんらかのペナルティを課す等して渡しても良い。

・成功 “[KPC]様関係”と記載されたファイルを見つける。

・ファイルの中をみる

中はインデックスによって種類分けされていた資料がまとめられている。

・資料一覧

現在に至るまで／満月と信仰／■■■■について

・現在に至るまで

ある神を祀る教団にて誕生。母は■■■■、父は不明。

（手書きで、父親が判明。この街出身の若者と思われる。

我々と同じ様に深きものの血と遺伝子をもつ可能性と書かれている）

兄弟がいたようだが、産まれてすぐにかの神に吸収されたようだ。

〔KPC]様のみ生かされ、信者たちの手によって育つ。

産まれてから暫くは、人の姿へ変身することができなかった。

った様だが、ある程度成長すると、親である■■■■と同じ
『変幻自在な性質』を利用し、普通の人間と変わりない姿を
とることも可能になった。

ある時、神は[KC]様の返還を要求。情を抱いてしまつ
た一部の信者は、[KPC]様を海へと逃した。

逃げたその後、近海を回遊していたところ（PCの名前
のアルファベット一文字）と接触。

その後、（PCの名前のアルファベット一文字）を探し
て何度も街の付近へ現れている。

この頃から徐々に、人に扮して街を歩く姿も目撃されは
じめている。警戒心が強く、不思議な術を使う為、接触は
要注意。

・満月と信仰

教団を立ち上げてから現在に至るまで、どうやら少しづ
つ[KC]様の力が強くなつてきている様に感じる。

これが、神の血が流れる故に、信仰によって力が増して
いるのか、単純に成熟によるものか定かではない。

また、満月が[KC]様に何らかの力を与える可能性が考
えられる。

元々、月の引力による潮の満ち引きや、月の満ち欠けと

生命は相関関係にあると言われている。現在でも、それら
の影響を受けて受精行動を行う生き物も多く存在する。

生命と進化を象徴する神の血を引いているのならば、満
月によって力が満ちるといふものもおかしな話ではない。

信仰する我々がそう思い込んでいるから、[KPC]様に力
を与えているという可能性も、無くはないのだが……。

・■■■■について

その神の名は「イドラ」と言った。

名を呼ぶことは言葉として力を与えるに等しく、書き連
ねることもまた同様と考える為、以降は伏せることとする。

かの神は数多くの姿をもち、それぞれが姿を保つために、
新鮮な遺伝子が必要とする。

つまり、定期的に生け贄を必要とするという事である。

ある地域では、定期的な生け贄と引き換えに信者を不死
とし、多産と豊作を祝福するとも言い伝えられているよう
だ。

あらゆる生き物から遺伝子を吸収し、常に進化をして生
き続ける。

その血が流れる[KPC]様もまた、その様な性質があるの

かと思いきや、ごく普通に生きていらつしやるようだ。

半神だからか、それとも人の側面を持つからか、まだまだわからないことは多い。

様々な資料を目にしたきみは、当然ながら困惑することだろう。

まるでお伽話か、神話か。

とうてい直ぐに飲み込めないだろう悍ましい知識の一端を知る。

S A N C 1 / 1 d 3

・収納棚

様々な器具や箱が雑多に詰め込まれている。

〔幸運／目星〕

・成功 黒地に銀の箱が押された箱が目に入る。

・失敗 特になし。

・箱を開ける

中には一本のナイフが収められていた。

ハンドル部分には細かい装飾がされている美しい銀色のナイフだ。

手にとると、ずつしりとした重さが腕に伝わる。

ただのナイフだろうが、どこか不思議な感覚を覚える。

【KP情報】3話の戦闘で補正が入るAFもどき。もどきなので、ほとんど普通のナイフ。持って帰って良い。

・作業台

脚のないタイプの大きな作業台だ。

卓上には試験管やピーカーなど、様々な器具が置かれている。

〔生物学／博物学／知識-20%〕

・成功 海水用と書かれたピーカーや脱塩水のボトル、pH測定器等が置かれていることに気づく。水質の検査でもしていたのだろうか。

・失敗 海水用と書かれたピーカーや脱塩水と書かれた

ボトルが置かれている事に気づく。何の実験をしていたのだろうか。

【KP情報】KPCの為に良い環境を提供しようと、最高の水質を求めていた名残り。

他に探そうとするなら、滅菌機や脱塩装置等もある。なんかいっぱいある。

□奥の扉

扉へ近づくと、先程から聞こえていた機械音がどこよりも大きくきこえる。

他の部屋と同様に鍵がかかっているが、渡された鍵で問題なく開けられる。

扉を開いて真っ先に目に入ったのは、水族館を思わせるような巨大な水槽だった。

——その水槽の中、底に沈んだまま横たわっているのは、人魚の[KPC]だ。

声をかけたり、水槽を叩くのならば、[KPC]は小さく呟いたのち、目を覚ます。

彼／彼女はきみの姿を確認すると、目を見開いてガラス面へと近づいてくる。

「[PC]！これはいったい……。いえ、怪我はありませんか？」

「わたしはなんとも。怪我はないと思うし……。強いて言うならものすごく眠いくらいです」

「でも、どうしてこんな……。わたしが人魚だって、バレていたんでしょうか」

・教団について話す場合

「そんな理由で？」

「そんなくだらない理由で、[PC]まで」

[KPC]は呟くように言葉をこぼすと、水槽へと爪を立てた。

眉をひそめ、不快だという感情を隠そうともしない。

やがて、きみがなにか声をかけるより先に、ぼこりと泡が立ち、[KPC]の姿が歪んだ。

水にインクを落とすように、とけるように、身体が形をかえている。

人のようで、魚のようで、鳥のようで、はたまた……。

それは彼／彼女が人から人魚へ、人魚から人へ変わるときの様子に少しだけ似ていた。

ただ、少し似ているというだけで、今の姿は様々な世界の法則や常識を無視した、悍ましい姿にしか見えない。

S A N c 1 / 1 d 8

発狂した場合、その場に釘付けになってしまうかもしれないような極度の恐怖症で固定。

【KP情報】声をかけるか時間が経てばKPCは落ち着く。PCが声をかけた場合は次の描写へ。そもそも詳細を話さなかった場合は、描写を抜かしてKPCから脱出の提案をする。

きみが声をかけると、(KP)はハッと顔をあげる。くぐもった水の流れるような音と共に、彼／彼女の身体が元に戻ってゆく。

「……ごめんなさい。そんなことより、ここから出ないと
いけませんね」

「水槽の出口は……」

〔KP〕は音もなく泳いで行く。

水槽の一番上にある跳ね上げ式扉の様なものを開けようとしているが、びくともしない。

水槽に気を取られていたが、部屋の至る所に大型の機械が設置されている。

また、水槽の横には、上部へ向かうための階段と、何処かへと繋がる扉がある。

一先ず、この空間から調べた方がいいかもしれない。

・ 詳細探索箇所

大きな機械／階段／扉

・ 大きな機械

様々な管が繋がっている大きな機械。水槽と繋がっている様だ。

〔目星〕

失敗しても成功と同じ情報を得られるが、焦りからS A

N値―1

・成功 機械の横の壁に、水槽上部ハッチと記されたスイッチがある事に気づく。解錠・施錠のつまみがあり、施錠されていることがわかる。

・解錠する
かちやんと控えめな音が何処から鳴る。

・KPCに開くか確かめてもらう
「若干手ごたえはあるんですが、押し上げづらくて……。開けてもらえませんか？」

・階段
水槽の上部へと向かえる階段。
登り切ると、タオルや〔TOW〕に似合いそうな衣類の入った棚があり、左手に跳ね上げ式の扉がある。

・扉を開ける
ハンドルを握り、力を入れる。想像以上に重く、なかなか扉が上がりきらない。

〔STR*5〕

・成功 勢いをつけて一気に力を入れると、金属の擦れる重い音と共に扉が開く。

・失敗 焦りからS A N値―1。成功するまで挑戦できるが、失敗の度にS A N値減少。

扉をあけると、〔KPC〕はきみへと手を伸ばす。

腕を引けば上半身がのぞき、そのまま脇を抱えて引き上げられる。

〔KPC〕はそのままきみへと抱きつく、背中へしつかりと腕を回した。

彼／彼女の髪や身体から滴る水が、じわじわときみの服や肌を侵食する。それでも触れた素肌は暖かくて、とろりと溶けてしまいそうほど心地よく、不思議な感覚だった。きみを抱きしめる腕は緩めないまま、〔KPC〕は人の姿へと戻ってゆく。

「〔PC〕、よかった……。本当にどこも怪我してませんよね？」

「……あ！ すみません。服、濡らしてしまつて」

「とりあえず、はやくこんなところ出ちやいましょう」

【KP情報】KPCにはPCを眷属にする意思はないが、出逢つた時より神としての力が増している事や、先程感じた怒りから不安定になり、一瞬PCへと影響を及ぼしかけた。

好きなだけ話したら探索へ戻る。

・扉

扉にはラミネートされた紙が貼られている。どうやら避難経路の紙の様だ。災害時にこの出入り口を使用することを禁ずるとかいてある。また、その下には「外からの施錠ができない為、海水の採取以外での使用を禁ずる。開けつばなしにしない！」と追記がある。

鍵がかかっており、槇島がくれた鍵では開かないようだ。

【アイデア】

・成功 察するに、出た先が海に近い為に災害時の利用を禁止されているのだろう。

・失敗 出た先が海に近いことはわかる。

・水槽横扉の鍵をつかう

扉の先は薄暗く、暫く歩くと階段があつた。

階段を上りきり、微かにきこえる波の音の方へと足を進める。

歩いた先には、ラッチロックと南京錠のついた扉が一つ。横には小さなキーボックスがある。

波の音が近く、この先が外であるということがわかつた。

・扉を開ける

キーボックスにかかつた鍵を使えば、南京錠は簡単に外れる。

扉を開けた先は、整備されていない岩肌がのぞき、少し先に見える光から、ここが洞窟の様な場所だということがわかる。

洞窟を抜けた先にあつたのは、小さな入り江だった。沈みかけた陽が煌々と水面を照らし、うつくしい景色を作り出している。

「綺麗ですね……。こんな騒動がなければ、もつと素直にこの景色を楽しめたんですけど……」

「……………」

【KP情報】まだKPCが攫われた事情を理解できていない場合、「あの場所まで来たってことは、なにか事情を知っているんでしょう？」とPCに尋ねる事。

このタイミングでKPCが様々なことを理解した場合、水槽に居た時と同じ台詞を呟く。

しかし、冷静になっているため、暴走はしない

「みしらぬ誰かが勝手に願うのも、理想をおしつけてくるのも、最終的に何になっても、割とどうでもいいんですよ」

「わたしがわたしであることで、[PC]さえ傷付かなければ」

「[PC]は特別。この特別すら心の気まぐれでも、特別なんです」

「……でも、またこんなことが起きるかもしれない」

「それでも[PC]は、ずっとずっと、変わらず一緒にいてくれる？」

【KP情報】その様なつもりはないが、無意識に眷属にしたいと感じている。ここでPCが了承した場合、3話の戦闘で補正が入る。KPは覚えておく事。

・了承する

[KPC]は頬を緩めてきみの手を握る。

「絶対。約束ですよ」

・拒否する

[KPC]は落ち込んだ様子で眉をさげる。

「……いきなりこんな事を言われても、困りますよね。ごめんなさい」

【KP情報】好きなだけRPをしたor帰る宣言があったら次へ。

「この入り江、自然にできた抜け道があるんです。少し濡れるかもしれませんが、そこから歩いて帰りましょう」

そういつて[KPC]はきみの手を握り、歩き出した。

入り江を後にしようと、抜け道に足を踏み入れた時、ふと、何処からか視線を感じた。

意識しなくてもわかる様な、肌を刺す強い感情。緊張感。確かな悪意。

[KPC]もはつとして振り返るが、誰もいない。そこにはただ、穏やかな海と砂浜が広がっているだけだ。

「気のせい、かな……？」

そんな呟きと共に、きみたちは再び歩き出した。

穏やかなはずの水面にも、絶えず波は立ち騒ぐ。ずつと、きみたちのことを見ている。

▼太陽と徒波 E N D
S A N 値 回 復 1 d 6

【K P 情報】

「太陽と徒波」でK P Cの「PC」はずつとずつと、変わらず一緒にいてくれる？」に了承した場合、それが軽い気持ちでも、「契約」となる。その為、契約が逆境に抗う力となつて3話で補正がつくようになる。